

**Q：作文指導について，内容や構成を高める指導法と個別指導の効果的な手立てを教えてください。**

**A：作文といっても・報告文・観察文・記録文・説明文・紹介文・宣伝文・推薦文・感想文・随筆・創作文など，その文種によって身に付く能力が異なり，指導方法も異なります。小学校の段階では作文の種類に応じて得手不得手があるわけではなく，「書くこと」が苦手な子はどの作文も苦手を感じる傾向があります。書く力は一朝一夕に身に付くものではなく，粘り強い積み重ねが大切です。**

## **アドバイス：**

### **①よい文章をまねさせましょう→「読むこと」と関連づけた指導を**

子どもたちが作文を「書けない」原因の多くは，「何を書いていいかわからない」「どう書けばいいのか分からない」というようなことだと考えられます。これを打破するために，まずは良いモデルをまねることから始めてみましょう。手本となる学習材や教師自作の見本をもとに，もとの文章に則って書き換えさせていきます。学習指導要領に示された学年の段階に応じて，学習材の構成や表現の工夫などを分析させながら読ませ，どう書かれているかを学ばせていきましょう。

また，子どもの書いた文章の中からよく書けているものを取り上げ，友だちの良さを見つけて真似て書くということを積極的に奨励します。「こういうことを書くのだ」「こういう風に書くのだ」と考えることができる上に，互いに読み合う活動を通してコミュニケーションを図ることもねらえます。

### **②題材や書く事柄，内容をしっかりと考えさせましょう**

「書けない」原因のもう一つは，「書くことが思い浮かばない」ということでしょう。これは，作文の内容面にかかわってきます。そこで「しっかり考える場」を与えていきましょう。方法としては，まず題材や書く事柄，内容をいくつか提示し，その中から選択させるという方法があります。ウェビングマップを使って，自分の考えを耕したり広げたりすること，友だち同士で練り合う場を持つことも有効な手立てです。「しっかり考える場のある授業」をつくっていきましょう。

### **③質より量を実践しましょう**

文章を書き慣れていない子どもたちに，「構成の整った文章を」「内容の充実した作文を」と要求したところで，よい作品を書くことは非常に難しいでしょう。スポーツに体力が必要なように，「書く」ためには「書くための体力」が必要なのです。そこで，「毎日書き，書き慣れる」ことを目指しましょう。授業の中に，書く時間を必ず確保したり，年間を通して計画的かつ継続的に書く活動を取り入れたりして「書くことの体力」向上を図ります。ただし，スポーツのトレーニングも同じことの繰り返しではマンネリ化すると同様，楽しくない，興味のない，感動のないことばかりを書かせていくのは，国語教育としてふさわしくありません。文種を選んで書かせたり，ゲーム的な要素を取り入れたものを書かせたり，テーマを絞って書かせたりするなどの演出も必要です。

「質」のよい文章は「量」の上に成り立つものです。